

東京クワルテット

～本拠地ニューヨークで 4/27 に行われた公演の速報レポート！～

この 10 年ほど、東京クワルテットの地元ニューヨークでの本拠地は、「92 丁目 Y」のカウフマン・コンサートホールだった。文字通りの本拠地。なにしろヴィオラの磯村さんなど、ご自宅アパートからここまで歩いて数分。家でステージ衣装に着替えて来られるのだから。

日本もゴールデンウィークに入った 4 月終わりの週末土曜日の晩。今日から三連休で、日本のソメイヨシノの散り際の良さとはちょっと違う桜もまだあちこちに見かけるマンハッタンはパークアヴェニューのひとつ向こうには、古い NY の庶民街の落ち着いた空気が流れている。

「92 丁目 Y」は、要するにユダヤ文化センターである。大ホールのカウフマン・コンサートホールはマンハッタンには意外に少ない 904 席の中規模ホールで、アールデコよりは後で国際様式にはまだちょっと早い 1930 年のオープン。日比谷公会堂とほぼ同時期と知れば、なるほどと思えてくる。この地域に似つかわしい外観の重厚さも素敵だが、こんな老兵なのにマンハッタンで普通に使用されているクワルテットのための演奏会場としては音響は最高なのである。



問題があるとすれば、ピアノシシモになると横をすり抜ける地下鉄の騒音が聞こえてくることくらいかしら。でも、これってマンハッタンでは珍しくなく、地元民は全然気にしてないから不思議です。

毎シーズンに 5 回から 6 回程度開催されるこの会場での東京クワルテット演奏会も、残すところ今日を入れてあと 2 回。でも、ホールには最終回に向けて盛り上げるポスターが



べたべた貼られるわけでもなく（そもそも昨今の NY の会場は経費節減のためにポスターは作らず凝った電光掲示板で済ます傾向にあるのだが）、いつもの演奏会のような。しっかり眺めれば、シーズン全体告知のポスターに「ファイナル・シーズン」とあるし、次回は「NY で最後の公演！」とも記されているのだけど。

開演前 40 分くらい、ロビーにカジュアルな格好の聴衆が集まり始める。と、ホールの方からポロシャツ姿のマーティン・ビーヴァー氏がやってくる。トロント

から到着したばかり、なかなか大変だよ、などとぼやきながらも、若い娘さんたちに取り囲まれている。生徒さんかなと思ったら、「ご紹介しましょう、娘です」って。何を隠そう、東京クワルテットを影で支える奥様軍団は、みな日本人なのだ。我々が最後のファースト・ヴァイオリンの娘さんもエキゾチックな可愛らしいお嬢さん。ケラケラ笑っているけど、チェロをお弾きになるそうなの。この 10 年間、東京クワルテットのマンハッタンでの活動をサポートしてきた「92 丁目 Y」のディレクター、才媛として当地に名を轟かすハンナ・アリー・ガイツマン女史も、まるで聴衆のようにロビーでリラックスしている。仰るに、「私はね、クワルテットの 5 人目なのよ（笑）。東京クワルテットはこのホールにとってファミリーでした。これ、美辞麗句じゃなくて、ホントのこと。」

気楽な格好の若者、フォーマルなジャケットのご隠居夫妻、楽器を手にした音楽家たち…いろんな人が客席に流れ込む。「僕は室内楽なんて高級なものに来ちゃったんだぞ」って空気が漂うリンカーンセンター室内楽協会のちょっとばかりスノッブな感じの聴衆に比べると、ここにはホントに音楽が好きな人だけが来ているのが判る。なにしろ、ロビーで会話に勤しむ人たちもそれなりにいるけれど、かなりの聴衆が自分の席に座って一生懸命当日プログラムの解説を読んでいるのだ。ちょっと北米では珍しい風景だ。「まあ、彼ら、次回で最終回なんですって、引退なのかしら」なんて老夫婦の会話も後ろから聞こえる。ファイナルに向けて、特別ではあるんだけど、いつも通りの音楽の楽しみがここにある。みんな東京クワルテットと一緒に歳を取ってきた人たちなのだ。



午後 8 時に演奏が始まれば、クワルテットはまるでいつもと同じです。ハイドンの作品 77 の 1 の生き生きとした足取りは、まるっきり老いた音楽ではない。クライヴとマーティンの丁々発止の掛け合い、それをじっくり眺めながら支える長老たち。

第 2 楽章での磯村さんの短い独奏がキラリと光る。トリオでは絶好調のマーティンが音色をガンガン変化させ、そして駆け抜ける終楽章だ。完全にヴィルトゥオーゾ・ピース、どう聴いてもあと数ヶ月で引退する団体の音楽ではない。大拍手！

続くコダーイ、休息を挟んだバルトークの 5 番（今シーズンのこの会場で、東京クワルテットは最後のバルトーク全曲演奏を行っている）と、いかにも定期的ハンガリーづくしの演目が続く。コダーイはこの曲がこんなに面白かったつけ、と思わせてくれる快演。バルトークでは、第 3 楽章スケルツォが終わるや期せずして会場全体から笑い声が巻き上がりかける。純粹に音楽的に楽しくて笑いがこみ上げ、止められないのだ。ひたすらに正確に弾くとか、ビックリするほど速く弾くとかしたところで、こんな風にみんながニコニコすることはない。終演後は、延々と長蛇の列のサイン会。というよりも、楽しい時間をくれた楽人たちとちょっとでも言葉を交わそうと、仲間や友人が列を成して待っているみたいなものだ。そう、東京クワルテットは、音楽で人々をニコニコさせてきた。そんなことが出来る人たちって、そうはいない。



本拠地での演奏もあと 1 回。サヨナラの曲は言うまでもなく、バルトークの 6 番です。

（2013 年 4 月 27 日ニューヨークにて 音楽ジャーナリスト 渡辺和）